

剣 道 部

長尾 啓一

平成21年5月23日（土）、24日（日）の2日間、千葉ポートアリーナにて第48回全日本医師剣道大会を千葉県がお世話をさせていただいた。千葉での開催は2回目である。

大会長は元千葉大学医学部放射線科に奉職され医学部剣道部がご指導いただいた遠山富也先生ということで、千葉大学医学部剣道部OBが中心となって準備から大会運営、そして全試合を記録したDVD作成まで担当させていただいた。実行委員長兼副大会長はS44年卒の西島浩先生（千葉社会保険病院長）、渉外にはS48年卒の広瀬彰先生（千葉市立海浜病院長）とS50年卒の小出義雄先生（鎗田病院副院長）、事務局としてS61年卒の新藤寛先生（新藤医院院長）とS47卒の長尾啓一（筆者、千葉大学総合安全衛生管理機構）があたり、全日本剣道連盟、千葉県剣道連盟との繋ぎ役にはS50年卒の佐々木健先生（稲毛整形リハビリテーションクリニック院長、全日本剣道連盟顧問医師）が、そしてS43年卒の鈴木秀先生（前千葉労災病院副院長）、S61年卒の川島辰男先生（東邦佐倉病院）にも随所でご尽力いただいた。もちろん剣の繋がりで県内の慈恵医大出身、霜禮次郎先生・守正英先生にも多大なご指導、ご助力を賜った。

大会当日には、当然現役部員諸氏の協力もいただ

き、大成功と相成った。終了後、記録のみならず記憶にも残る素晴らしい大会であったと遠山会長宛に多くの参加者からお褒めの言葉を頂戴した。さもありなん、千葉大学医学部剣道部に連綿と繋がる伝統、秘めたる力の賜物である。

さて、35年前の剣道部を想起してみよう。昭和49年である。野球グラウンドの西北側の法面（のりめん）、連絡道路と弓道場の間に焼却炉の高い煙突が残り、その横に頑強な平屋の建物があった（写真1）。建物中央、野球場側に玄関口があり、右が柔道場、そして左が剣道場であった。玄関前には桜の古木があった。玄関を入ると突き当たりに旧病院と繋がるスチームが引かれた浴場があった。一時教場または寮として使われたとも聞く。トイレはいつ汲み取りが来たのか分からないほど排泄物が貯まっており、前使用者の健康状態が容易に分かるという代物であった。しかし、道場の両窓側には1畳幅で畳が敷かれた上がりがあり、使い勝手はすこぶる良かった（写真2）。昭和42年までは縦230cm横150cmの姿見があったが筆者の同級生の突進で一挙に破壊され、以降そこに鏡の取り付けはなくなった。

件の昭和49年3月、当時の剣道部顧問の第一外科教授綿貫重雄先生が退官された。昭和12年千葉医科大学卒業の剣道部大先輩であり、眼光鋭くいかにも



写真1.奥が旧道場。桜が美しかった。



写真2.旧道場での稽古風景。順番待ちの上りは畳敷き。

第5章 交友の広がり

剣士風であった。まったく飾らない方で、往時のナンバー外科教授という当時話題の「白い巨塔」を想像したがその対極にあるような先生であった。しかし、その存在感はすごく、稀に道場に來られると緊張感が漲った。先生は昭和59年に剣道範士の称号を授与され、翌60年に千葉で初めて開催された全日本医師剣道大会の会長を務められた。綿貫先生ご退官後の剣道部顧問は眼科教授の石川清先生であった。石川先生は昭和19年千葉医科大学卒業のこれまた剣道部の大先輩。温厚で洒脱な先生であった。ここからが過去35年の始まりである。この時期、筆者はすでに卒業していたが後輩達はこの後およそ10年間、われわれと同じようにこの道場（以下旧道場）で青春を謳歌した。

剣道部の年間行事は新入部員勧誘から始まる。当時は医学部事務に行って学生の個人調書を拝見し（今ではとんでもない行為である）、剣道経験者をリストアップ。そして入学手続きに來た学生を捕まえるというものであった。時には「医学部剣道部って強いんですか？」などと聞く失礼な輩もいたが、多くは剣道という一語でシンパシーを示してくれた。

その後、4月に新入部員歓迎コンパ。当時は高校卒業＝社会人と見なされたので新入生は飲めようが飲めまいがアルコールの洗礼を受けた（これも今ではとんでもないことである）。5～6月には関東医歯薬獣剣道大会新人戦と個人戦があり、昭和58年には新人戦で優勝という快挙、そして以降も個人戦では常にだれかが入賞していた。

続いては6月に金沢大学、新潟大学との持ち回り三大学対抗戦があった。東日本の旧6医科大学中3校での親睦試合であったが、剣道試合の後の懇親会がこれまた凄かった。金沢、新潟は酒処である故か、懇親会では千葉の苦戦が続いた。しかし、おかげで今でも人脈は保たれており、医学・医療面でも交流がある。

7月の学科試験が終わると直ちに夏合宿となり、旧道場に布団をレンタルして泊まり込みの稽古となった。蚊やブヨが多いのは時代と土地のせいである。寝る前には寝所である道場を閉め切って殺虫剤のバルサンを焚く。疲れて死んだようになって寝ても朝6時には「起きろー」の声で起床。朝のトレーニングが終わると朝食。稽古の前には雑巾を使って四つん這いになっての道場床ふきである。午前の稽古、昼食、午睡、午後の稽古。稽古後の夏の水風呂は心地よかった。締めくくりの夕飯も学食で。まさに同じ釜の飯を喰らったわけである。

合宿が明けると東日本医学生体育大会であった。昭和63年には団体戦で準優勝を果たしている。個人戦では昭和50年卒の佐々木健先生の個人戦優勝をはじめ、入賞はしばしばあった。また、遠征は楽しく、大会後の旅行はすべてから開放されて至福の時間であった。

秋には11月に関東医歯薬獣剣道大会があり、公式戦はこれで終了。そうこうしているうちに12月となり、納会と卒業生の追い出しを兼ねたコンパとなる。ここで主将、主務等役職交代となり剣道部の年間行事が終わる。

石川先生が顧問をなさっていた最後の年は剣道部にとってたいへん大きな出来事があった。剣道場の移設である。旧道場は老朽化のため取り壊しとなり、新たに体育館を兼ねた新道場が建てられた。場所は旧肺癌研究施設の跡地で旧精神科棟の前である。近くに七天王塚をお祀りした巨木がある。昭和58年5月7日、新入部員歓迎を兼ねて新道場で大先輩のお名前に因んだ数馬杯争奪戦を行い、終わって旧道場にて別れの杯を傾けた。古く大きな額に飾られた「剣学一如」の書、壁のあちこちにある竹刀で突かれて空いた穴、足底のマメからの浸出液もしみこんでいるだろう黒光りした道場の床、部室として使われた小部屋の気の利いた落書き、何をしても開けなかった風呂場の石風呂、何もかもが思い出である。これにより旧道場は建設以来実に51年になる歴史の幕を閉じた。翌59年4月に石川教授は定年退官され、顧問は寄生虫学教授で剣道部OBの小島莊明先生に引き継がれた。小島先生は戦後医学部剣道部が復活した初代の主将であり、同先生は前記した全日本医師剣道大会を盛会裡に運営された。しかし、平成元年に東京大学医科学研究所に教授としてご栄転され千葉を去られた。

引き継いで顧問になられたのは旧第一外科助教授の更科廣實先生であった。更科先生は豪放磊落なようできて大変な人情家であった。吉川英治著の宮本武蔵から「剣は心なり、心正しからざれば、剣また正しからず」の一節を引用し剣の精神を部員に浸透させ後輩から大いに慕われた。まさに、剣を交え、語り合い、酒を酌み交わし、涙するという顧問・OB・現役部員の結束大固い時代であった。この時期、団体戦ではいいところまで行くものの入賞には届かなかった。しかし、平成5年卒の安藤拓志先生の2年連続東医体個人優勝という快挙は特筆するに値した。またこの頃から新道場での寒稽古が始めら

れ、土曜日の打ち上げでは餅つき大会が行われるようになった。

平成7年に更科先生は千葉市立病院（現在病院長）に転出され、引き続き肺癌研究施設病理教授の大和田英美先生が顧問になられた。大和田教授はお嬢さんが剣道をされていたことと、当時、病理で昭和56年卒業の笠松紀雄先生が研究をしていたという縁で引き受けて下さった。剣道部の先輩が医学部内にいないという危機であったが、大和田先生の顧問受諾は剣道部一同にとり涙が出るほどありがたかった。そして、事実剣道部員もさまざまな相談を持ちかけそれに親身に対応して下さいました。その大和田先生も平成15年にご退官となり、剣道部に関係がある医学部教授が不在という状況に陥ろうとしていた。そんな中、大和田先生は医学研究院遺伝子生化学（旧第一生化学）教授の瀧口正樹先生に剣道部顧問をお願いして下さいました。奇しくも瀧口先生は筆者の全学剣道部同期部員（工学部）の弟さんに当たる。

平成10年代前半は大学生の一気飲み、ついでアルハラが大きな問題となった時期である。特に運動部の若者は何をするにも全開の状態エネルギーを発散する傾向が強く、昔を知るOBは後輩の気持ちも分かりすぎてしまう。瀧口先生は顧問としてハラハラし通しであったと思われるが、場が愉快かつ学生が処分を受けたりしない様に度々直言してくださった。おかげで今でも新入生歓迎会、卒業生送別会などの宴席にはOBも心地よく出席させてもらっており、縁の繋がりに感謝している。平成21年5月から

は昭和63年卒剣道部OBで糖尿病・代謝・内分泌内科の教授に就任された横手幸太郎先生が顧問を引き継いだ。また新たな医学部剣道部のエポックが始まった。

今一度この35年間を振り返ってみよう。老朽化したとのことで取り壊された旧道場であったが、その床の艶の見事さは今でも覚えている（写真3）。平屋の高い屋根は古くなったとはいえ頑丈な瓦で覆われ、大概の雨では雨漏りの心配はなかった。そのお陰で真夏でも室温が異常に高くなるということもなかった。そして夏合宿の夜も睡眠を妨げるほどの暑さはなかった。旧道場の跡地は更地になっているが道場入り口にあった桜の木はそのままである（写真4）。数年以内には医薬系の新館が建つ予定である。新道場と言われた現在の体育館内の道場もすでに築後26年となった（写真5）。道場の手入れは良いがシャワー室などの老朽化で修繕を繰り返す現在である。部室は旧精神科病棟の建物内にあり、清潔感に乏しいのは昔の剣道部のままである。

宴席を伴う行事も変わった。35年前は歓迎会、歓送会はいずれも医学部キャンパス西門に隣接した医学部同窓会館であった。今では倒壊寸前であるが何とも使い勝手の良い施設であった。その後、宴席は医学部正門前の中島ホテルの宴会場に移り、最近では院内町の割烹が使用されている。二次会も昔は「ごみとり」が定番であったが、その後中華料理店、鳥料理専門店へとグレードアップされた。豊かになった故であろうが本当に変わった。



写真3.旧道場での練習試合。床の艶は見事。



写真4.旧剣道場の跡地。桜の木は残っている。

医学部剣道部OBの活躍ぶりは目覚ましい。千葉市内の公的病院の内、3つの病院長が剣道部OBである。昭和46年卒の保坂善昭教授は昭和大学形成外科にて、昭和53年卒の吉原俊雄教授は東京女子医科大学の耳鼻科にて医学研究・教育業務に就いている。また、共に旧道場で汗を流した多くのOBが診

療所、病院の第一線医療で活躍しているが、最後に文筆家として大活躍の2人のOBを紹介する。

奇しくも2人ともミステリー小説を著して大賞を受賞されている。まず、昭和42年卒、剣道部OBの結城五郎（ペンネーム）氏。平成9年度第15回サントリーミステリー大賞をデビュー作品「心室細動」で受賞され毎年新刊を世に出されてきた。

もう一人は昭和63年卒、剣道部OBの海堂尊（ペンネーム）氏。平成17年度第4回「このミステリーがすごい」大賞受賞。デビュー作品は後に映画化もされた「チーム・バチスタの栄光」であった。この番外編として著された「光の剣」には同氏の大学時代の剣道部経験が余すところなく活かされていた。

こう綴ってくると、剣道部での連綿と続く人の繋がりはまさに「交剣知愛」の実が具現されているように感じる。先輩達から受けた恩はそのまま後輩達に引き継いで行くというまさに輪廻転生である。剣道部員、OB諸氏には剣道で鍛錬した智・徳・体を遺憾無く医療・医学のために駆使し、今後一層発展をされることを祈念する次第である。

（ながお けいいち）



写真5.新道場での集合写真。昭和58年、関東医歯薬獣剣道大会新人戦優勝の賞状を持って。後ろに旧道場から移した「剣学一如」の額が見える。